



「先生、この測り方ってあつてるの？  
なんか手もすぐく震えているんだけど……  
あと、鉛筆はどうした？  
ねえーねえってばー」

（ミカに頼まれて胸囲を測る「」と「」  
なつてしまったのだが、  
これってほんと大丈夫なのか……？）

「……じーっ」

「ミ、ミカ？  
どうかした？」

「そっつだよね、先生も  
男なんだし……大人だし」

「あはは？  
一体何のことかな……？」



「あのねっ？ちよっと  
先生のズボン膨らんでない？  
さつきから見てたけど、  
あれ普通のサイズ？  
それとも…ぼっ」

「おおおっ！！ミカの  
むむむ、胸つてかなり  
大きいよね！」

「えっと、23センチメートル…  
いや、25？」これならGカップぐらいかな」

「……あ、ありがとう」

(やば、慌てて適当に言っちゃったけど普通にセクハラになってるんじゃないか……)



「あ、そうだ！先生、今日も忙しいのに  
こうして手伝ってくれたんだから  
私もお返ししなきゃ…ね♪」

「うん？いやいや、別にいいよ……ん、  
ミカ？？なんでぬ、脱ぐの？！」



「じゅわじゅわーん！☆  
じゅわじゅわーん！先生〜♥」

「うわわわっ！」

すぐくセクシー…じゃなくて！！

またこないたずらを…ほんとに怒るよー！」

「もっ…おちんちんは

ヤツキから怒ってたかくせにヤ」

実は興奮してるんでしょ？」

「おっぱい測る時も乳首に  
手を触れて…  
私とえっちなことする想像したり」

「ごっごっないよ……」  
生徒に「そんな」しなごっ」

「うそだ〜素直じゃないんだから☆」

「私って今のままじゃ抵抗もできなから、  
先生がしたいことすれば……？」  
なんでも許すよ」



「え…っ？ミカ…いいのか？  
こんな僕なんかで」

「違うね、  
先生だから…だよ？☆  
私だけの…♡」

「ミ、ミカ…そこ」  
「まで  
言われたらもうっ」

「やった!!!  
んじやあ、どうしたい？  
揉む？舐める？」





「ミカのロビ  
気持ちよ〜くっ欲っ〜」

「えっ、突然積極的だね……  
まあ、私はいいんだけど☆」

「それ〜っでも〜っ近く  
先生のおちんちんが……ふあ……  
男の匂いとえっちな形で  
頭がクタクラしちゃうかも」



「んっ、ふあっ、ペロペロ…  
すこし汗の匂いと…石鹸の匂いが  
混ざって変な感じだけど…  
これ…くせになるかも」

「ああっ、裏すじばっかり…  
気持ち良すぎてるっ」

「えへへ、先生と出会った時から  
いつかこうしたかったんだなあ…  
付き合ってくれたらもっと嬉しいけど」

「ほ、僕のこと好きだった？  
いつから…」

「先生ってそっうちのほうは鈍感だもんねー  
ま、そこが好きだなあ…ちゅっ♥」

は…

は…

ペロ…





「ぢゅぢゅぢゅぢゅ」  
「ぢゅぢゅぢゅぢゅ」

「あっあっ、急に激しくっ、  
ミカっそろそろ限界だ！」

ぢゅぢゅ

ぢゅぢゅ

（先生の精液…♡  
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡）

「…うん…うん…」  
「…うん…うん…」

「むむむっー!♡♡」

ビュルルッ

びゅるるるるる

「あぁっやばっ……!」  
「亀頭吸われながらっ……」  
「腰抜ける……はぁっ」

「はあ…♡全部出し切った？  
これ見て〜すごい量…♡♡」

「ミカ…エロすぎ」

は…

〜

は…

「私のお回ちゃんど見てね〜  
「うんくん見せてあげる」





グワッ♡

もぐもぐ

「……」

「えへへー全部飲んだーほらー  
少し漏れたけど…  
これで先生への気持ちは  
嘘じゃないってことで  
証明できました!!☆」

「ミカ……  
まったくミカには勝てないな……」

「でしょー？  
先生の攻略法はもう  
調査済みなんだから」

はー

はー





「実は僕も好きっていうか、ミカのことのが気になって…そうれでね、もし、もしよかったら僕と」

「こんな意地悪な私だけけど…先生さえよければ私と付き合ってください…」

「あ、ひん、その言葉はわるいよ…」

「えへっでもちやうど伝わったよ？だって、とても大量だったもの」

「そ…そうだね…えっ？それどうなのかよ」

